第３章　史跡の概要および現状と課題

第３章　史跡の概要および現状と課題

３－１　史跡の概要

１．史跡指定地

（１）指定範囲・面積

■指定名称：史跡中里貝塚
■指定年月日（官報告示）：平成 12 年（2000）9月6日
　　平成 24 年（2012）9月 19 日　追加指定
■所在地：東京都北区上中里二丁目
　　（2-19, 2-20, 4-25, 8-3, 8-14, 9-13, 9-14, 8-4, 8-5, 9-3, 9-17）
■指定面積：6,248.49 ㎡
■指定理由：
　最大で厚さ 4.5 メートル以上の貝層が広がる、縄文時代の海浜低地に営まれた巨大な貝塚。焼石を投入して水を沸騰させて貝のむき身を取ったと考えられる土坑や焚き火跡、木道などが確認されている。生産された大量の干し貝は、内陸へ供給されたものと想定され、縄文時代の生産、社会的分業、社会の仕組みを考える上で重要である。

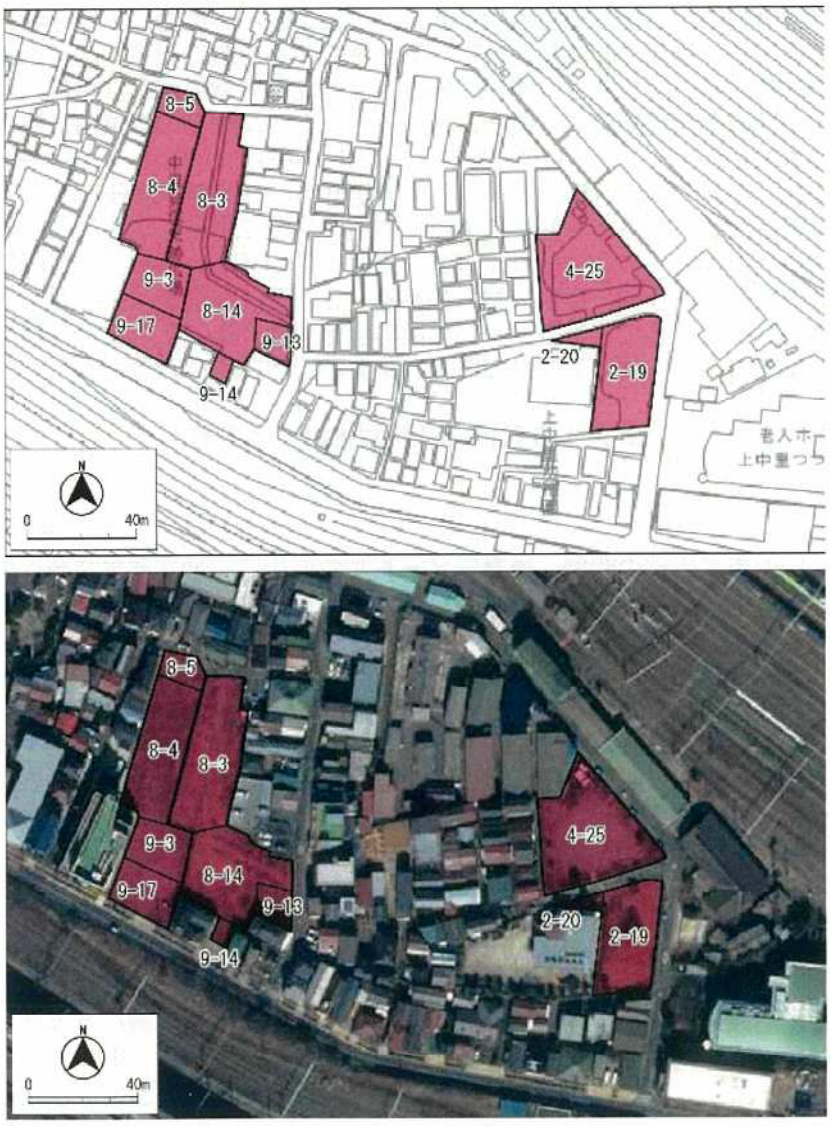

図 28　史跡指定地の地番図

（２）指定説明文

① 平成１２年（２０００）７月１日発行『月刊文化財　七月号』

中里貝塚

東京都北区上中里二丁目

中里貝塚は、武蔵野台地下、旧東京湾奥部の西側の浜辺に営まれた縄文時代の貝塚である。付近の武蔵野台地上には同じ縄文時代中期の西ヶ原貝塚や御殿前遺跡がある。

中里における貝塚の存在は早くから知られ、大森貝塚の発掘から九年後の明治十九年には白井光太郎によって「中里村介塚」として学界に初めて報告された。その後、明治二十九年には鳥居龍蔵らが、貝塚を見渡したスケッチを残している。このように明治年間から学界に報告され注目された貝塚であったが、その後、鉄道敷設や宅地化でしだいにその存在も忘れられていった。

昭和三十三年に和島誠一による調査が行われ、厚さ二メートル以上に及ぶハマグリとマガキからなる貝層が確かめられた。昭和五十八―五十九年に周辺で行われた調査でも、当時の浜辺からムクノキ製の丸木船一艘と集石炉二基が出土した。公園建設に伴って北区教育委員会が行った平成八年の発掘調査では、厚さ四メートルの大規模な貝層と貝の処理施設と考えられる二基の浅い皿状の土坑が検出された。この土坑は一・六×一・三メートルと〇・六×〇・五メートルの大きさで、いずれも内壁に粘土を貼り、枠取りをするように枝を縁に巡らしている。土坑内からは大小の焼石やマガキのブロックが出土したことから、土坑中に貝を置いて水を張り、焼石を投入して水を沸騰させ、貝の口を開けた処理施設であったと推測された。こうした施設を用いて集中的に貝を加工した結果、膨大な量の貝が堆積したことも想定された。また、出土土器から貝層の形成は縄文時代中期中葉から後期初頭であること、貝層中には焚き火跡と判断される木炭層や灰層があることも確認された。さらに、平成十一年にも、マンション建設に先立って、北区教育委員会が平成八年の調査地点の西一二〇メートルの地点を発掘調査し、厚さ二メートル以上の貝層下の波食台に敷かれた長さ六・二メートル以上の木道と、それに続く長径三・二メートル、短径一・七メートル、深さ〇・五メートルの土坑を確認した。なお、平成八年、十一年の両調査地点とも保存が図られている。

このように中里貝塚は、集落から離れた浜辺で付近の集落に暮らした人びとが協業して貝加工を行った結果残された、南北一〇〇メートル以上、東西五〇〇メートル以上の範囲に最大で厚さ四・五メートル以上の貝層が広がる、巨大な貝塚である。そして、縄文時代に自給自足的な範囲を越えて内陸の他の集落へ供給することを目的とした貝の加工処理があったことを各種の遺構で具体的に伝える重要な遺跡でもある。よって史跡に指定し保護を図るものである。

② 平成２４年（２０１２）９月１日発行『月刊文化財　九月号』

中里貝塚

東京都北区

中里貝塚は、旧東京湾奥部の西側、標高三メートルの浜辺に立地する縄文時代中期後半の貝塚である。その存在は明治初期から学界で広く知られ、東西五〇〇メートル、南北一〇〇メートル、最大厚四・五メートルの貝層は、国内最大級の規模を有する。

この分厚い貝層は、ハマグリとマガキの純貝層によって形成されることや、周辺に居住域が未確認であったことから、かつては自然貝層とする見解もあった。しかし、昭和五十八年以降の北区教育委員会による数度にわたる発掘調査により、少量ながら加曽利Ｅ式土器が出土すること、浅い土坑から出土する焼け石やマガキから煮沸等による貝の加工が想定されること、貝層中から焼土・木炭・灰がブロック状に包含されること等から、貝の加工を集中的に行った結果として貝層が分厚く堆積したことが明らかになった。また、貝塚に近接した低地からは、ほぼ完全な形の丸木舟が出土し、旧東京湾における海上活動の一端も明らかになった。このように、中里貝塚はその規模もさることながら、居住域に近接し生活残滓の廃棄によって形成された通常の貝塚とは異なり、貝の加工場として生業実態を知ることのできる数少ない貝塚であることから、平成十二年に史跡に指定された。

今回、既指定地の西側隣接地において発掘調査を実施したところ貝層の西端部が確認された。また、貝層の上部に縄文時代晩期の泥炭層が確認されたことで、海退による陸化の状況も具体的に明らかになった。よって、この部分を追加指定し、保護の万全を図ろうとするものである。

（３）土地所有状況・公有化の経緯

約 62,000 ㎡に及ぶとみられる貝層の分布範囲のうち、その約 1/10 にあたる 6,248.49 ㎡が、現在史跡に指定されている。東西２箇所に分かれる史跡指定地は、いずれも公有地である。

東側指定地は、北区が公園用地として土地を取得し、史跡指定前には公有地となっていたものである。また西側指定地は、マンション建設に伴う事前調査中に史跡指定ならびに土地買上げの方針が決まり、公有地化が図られたものである。なお追加指定地については、平成 23 年（2011）に西側指定地の隣接地にて、工場跡地におけるマンション建設計画を契機として行われた範囲確認調査で、2mを超す良好な貝層の遺存が確認されたことを受け、指定後に公有地化したものである。

表５　中里貝塚の調査履歴と公有化の経緯

	中里遺跡 （中里貝塚）	中里貝塚（史跡指定地）／合計面積：6,248.49 ㎡		
		A地点 2,177.45 ㎡ 2-19, 2-20, 4-25	B地点 2,256.25 ㎡ 8-3, 8-14, 9-13, 9-14	J地点 1,814.79 ㎡ 8-4, 8-5, 9-3, 9-17
明治 19 年 (1886)	白井光太郎が「中里村介塚」として『人類学会報告』に初めて報告			
明治 27 年頃 (1894 頃)	鳥居龍蔵・佐藤傳蔵の調査			
昭和 33 年 (1958)	和島誠一のトレンチ調査	(和島トレンチ)		
昭和 57 年 (1982)	東北新幹線事業に伴う試掘調査を実施（中里遺跡）			
昭和 58 年 (1983)	“東北新幹線中里遺跡調査会”・“中里遺跡調査団”設立、本調査を実施			
昭和 59 年 (1984)	東北新幹線事業に伴う本調査が終了（中里遺跡）	最大厚 約4.5m の貝層を検出		
平成２年 (1990)	上中里 2-45（老人ホーム）と東田端 2-20（東日本旅客鉄道本社ビル）の発掘調査			
平成８年 (1996)	北区が公園用地として取得した“上中里２丁目広場”の発掘調査 10/12、10/19：現地説明会を開催 11/13：天皇皇后両陛下が御見学	A地点の調査		
平成９年 (1997)	7/14：『中里貝塚－発掘調査概報－』を発行			
平成 10 年 (1998)	3/2：貝塚町会館にて地元説明会を開催 上中里 2-6-9, 2-8-3, 2-4 の確認調査	12 月 11 日：工事着手		
平成 11 年 (1999)	工場移転に伴う開発計画の事前調査（B地点）	4 月 1 日：広場の開園	B地点の調査	
平成 11 年度末			3 月 15 日：公有地化	
平成 12 年 (2000)	上中里 2-6-2, 2-11-3, 2-18-2, 2-4, 2-10-13 の確認調査 10/21 ～ 11/19：B地点を再発掘し、貝層を一般公開 10/25：史跡のパンフレット・小冊子を発行	9 月 6 日：国史跡に指定		
平成 13 年 (2001)	1/15 ～ 3/9：B地点の暫定整備（側溝・門扉等）			
平成 16 年 (2004)	9/22 ～ 12/15：B地点の園路等整備（園路・散水栓等）			
平成 20 年 (2008)	9/10 ～ 9/30：B地点の道路段差解消（アスファルト舗装・境界標設置）			
平成 22 年 (2010)	10/23 ～ 12/5：国史跡指定 10 周年記念の企画展“奥東京湾の貝塚文化”を開催 11/21：企画展の会期中にシンポジウム“中里貝塚と縄文社会”を開催			
平成 23 年 (2011)	製油工場の解体工事に伴う確認調査（J地点）			J地点の調査
平成 24 年 (2012)				9 月 19 日：追加指定
				11 月 2 日：公有地化
平成 25 年 ～平成 26 年	9/21 ～ 3/31：J地点の史跡広場拡張整備（フェンス・擁壁・門扉・側溝・植栽）			
平成 29 年 (2017)	中里貝塚の『総括報告書』を刊行			
平成 29 年度 ～令和元年度		保存活用計画策定		

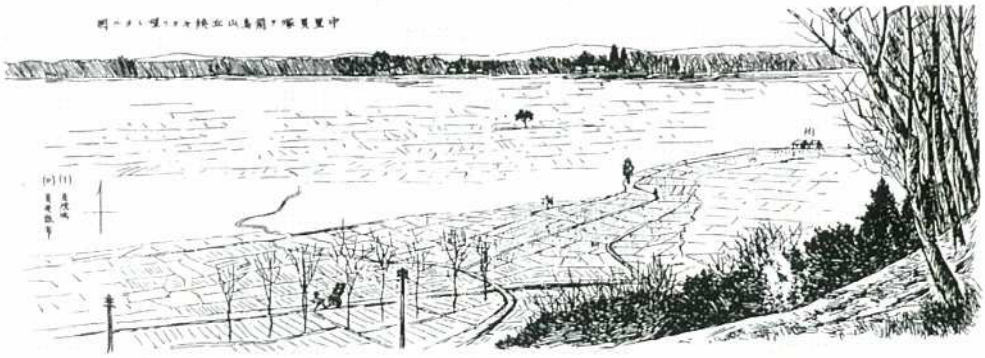

図 29　明治期のスケッチ（鳥居龍蔵・佐藤傳蔵調査時）

２．調査の概要

（１）中里貝塚の発見

東京都北区に所在する中里貝塚は、縄文時代中期から後期初頭にかけて、当時の海岸線に形成された大型の貝塚である。

夥しい量の貝殻が露出する様子は、古くから人々の耳目を集めていたようで、江戸時代後期の地誌や絵図面に「かきがらやま」「かきからづか」（漢字の表記方法には種々あり）として、その様子が記されている。また『江戸志』によると、これらの蛎殻は胡粉（近代においては焼石灰）の原料として転用されたことが記されている。だがこの時代、なぜ当地から大量の貝殻が見つかるのかという、要因についてまで言及するものは少なく、『江戸砂子』等が「むかし此邊入海なりしといひつたふ」と記述するにとどまる。

その中里貝塚を「遺跡」として、学界に名を広めたのは植物学者の白井光太郎である。明治 19 年（1886）に、「中里村介塚」と題して『東京人類学会報告』にて発表するや否や、気鋭の研究者により、中里貝塚の性格はさまざまに議論されていくこととなる。だが昭和時代に入ると、中里貝塚について記したものの多くが、この辺りに貝塚があったとの遺功を伝えるのみとなっている。尾久駅・上中里駅の開業等に伴って急速に市街地化が進み、貝塚は町並みおよびその地中に埋没していったためと推測される。中里貝塚周辺の「内貝塚」「西貝塚」「貝塚向」などの、貝塚に因んだ小字名も、昭和 22 年（1947）の北区成立前後の町名変更の中で次第に消えていき、現在では町会名に残されているばかりである。

中里貝塚の実態解明は、昭和 58 年（1983）以降に行われた一連の調査により劇的に進められていくこととなる。とりわけ平成８年（1996）に行われたＡ地点での調査は、最大で 4.5mもの厚さにある貝層や木枠付土坑（貝処理施設）といった、中里貝塚の性格を決定づける新たな発見が相次いだものであった。白井光太郎による「中里貝塚の発見」から 100 有余年を経て、中里貝塚はようやくその全容が明らかとなったのである。

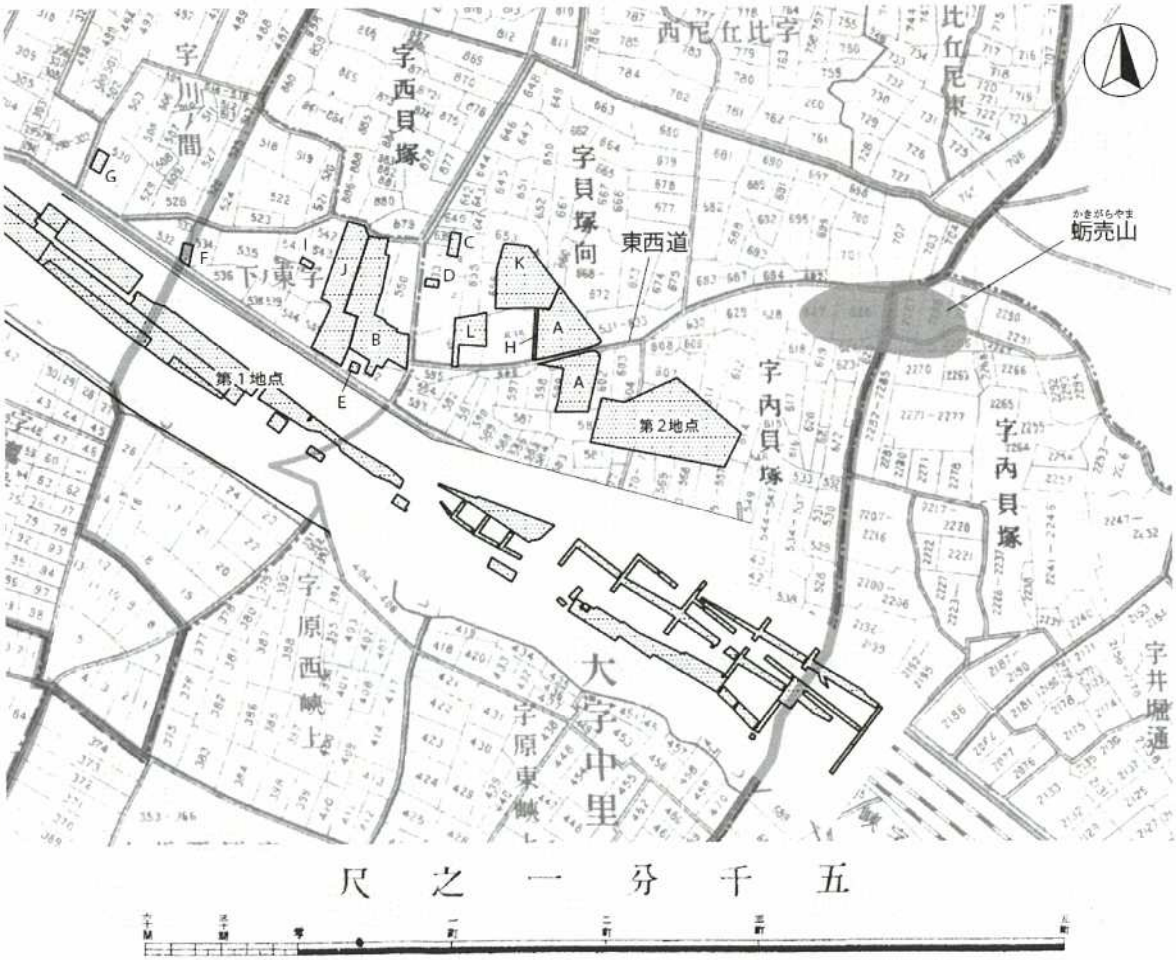

図 30　調査地点周辺にみえる「貝塚」地名（『史跡中里貝塚総括報告書』p115 より引用）

（２）発掘調査の概要

中里貝塚では、これまでに 12 地点で調査を実施し、貝層の分布範囲などを確認しているが、特徴的な遺構等は、現在の史跡指定地にあたるＡ地点およびＢ地点で検出されている。

表 6　調査地点

調査地点名	事　業　名	発掘調査期間	調査面積	調　査　者
第1地点	東北新幹線敷設	1983.6.27～1984.10.3	24,000㎡	東北新幹線中里遺跡調査会
第2地点	老人ホーム建設	1990.7.1～1991.1.19	1,700㎡	中里遺跡調査団
Ａ地点	公園整備	1996.7.24～11.21	1,100㎡	中里遺跡調査団
	防火水槽	1996.12.6～1997.1.24	23㎡	中里遺跡調査団
	学術調査（杭区）	1996.12.6～1997.2.5	50㎡	北区教育委員会
	学術調査	1998.9.28～10.9	13㎡	北区教育委員会
Ｂ地点	マンション建設	1999.9.8～2000.1.15	650㎡	中里貝塚遺跡調査会
	確認調査（北側）	1999.9.28～10.18	60㎡	北区教育委員会
Ｃ地点	確認調査	1998.8.10～8.14	11㎡	北区教育委員会
Ｄ地点	確認調査	2000.6.27・28	9㎡	北区教育委員会
Ｅ地点	確認調査	1998.8.10	8㎡	北区教育委員会
Ｆ地点	確認調査	2000.8.14～8.18	4㎡	北区教育委員会
Ｇ地点	LPG貯槽設置	2000.9.1～9.18	72㎡	中里遺跡調査会
Ｈ地点	下水道工事	2000.9.27～10.4	31㎡	北区教育委員会
Ｉ地点	確認調査	2000.11.10	2㎡	北区教育委員会
Ｊ地点	確認調査	2011.6.20～7.25	281㎡	北区教育委員会
Ｋ地点	確認調査	2014.11.25～12.5	85㎡	北区教育委員会
Ｌ地点	確認調査	2015.2.12～3.6	47㎡	北区教育委員会

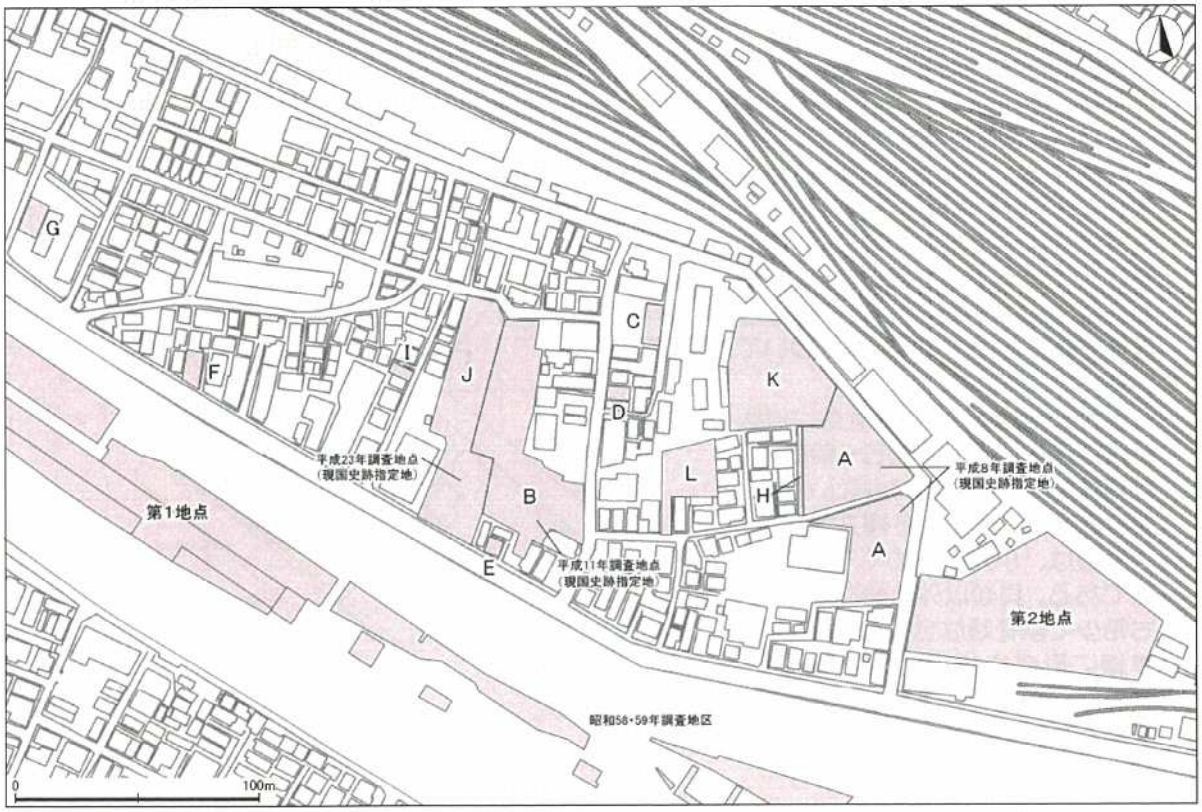

図 31　調査地点位置図

① Ａ地点（東側指定地）【上中里２丁目広場】

Ａ地点は、平成８年（1996）に調査が行われた地点で、現在の上中里２丁目広場に相当する。Ａ地点では公園整備に先立つ事前調査で貝塚本体を検出し、長短10本のトレンチを設定してハマグリとマガキの純貝層を掘り下げた。

貝層は塚状の堆積を呈し、南北幅約30～40mの塚状の高まりが東西方向に延びる。その層厚は4.3～4.5mを最大厚とし、随所に4.0m前後を測った。層序は大きく３層に分けられ、貝層の下層はマガキ主体層、中層ではハマグリ・マガキが交互に堆積する様子がみられた。そして上層はハマグリの純貝層を覆うように再びマガキが堆積している。なお貝層上面から概ね1.5mほどの深さで湧水があるため、水中ポンプでの排水処理が行われている。

Ａ地点第２区（南側）、貝層と田端微高地が接するところの砂層中からは、本貝塚を特徴づける木枠付土坑が２基検出された。これは枠取りをするように土坑の内面に枝を巡らせた遺構で、貝層形成の初期段階において貝を茹でる、あるいは蒸すことで、効率よくマガキの身を取り出すために使用された処理施設と推測できるものである。周辺にはこのような遺構がいくつも存在したとみられ、加工場的な空間を構成したと考えられる。なお標高3.5mを境に上部の貝層中にはレンズ状に堆積した炭化物や灰が幾重にも検出されているが、これも同様に土器を用いずに殻から貝肉を取り出した、剥き身処理の痕跡とみられている。

またＡ地点第１区（北側）では、貝層下に堆積するシルト層（干潟）に打ち込まれた状態の杭が６本確認されている。これらの杭は先を尖らせたもので、規則的に並んで列をなしているようである。そのことから、かつてはマガキの養殖にかかわるものとの可能性も指摘されたが、用途については不明である。

出土した遺構は、貝層を除けば限られ居住施設はない。人工遺物も一般的な貝塚に比べ、極端に少ないものであった。出土した縄文土器の総数は、小片を含めても81点である。貝類以外の動物遺体も希少で獣骨類は全くなく、海岸線に形成された貝塚であるにもかかわらず、魚骨もわずかであった。

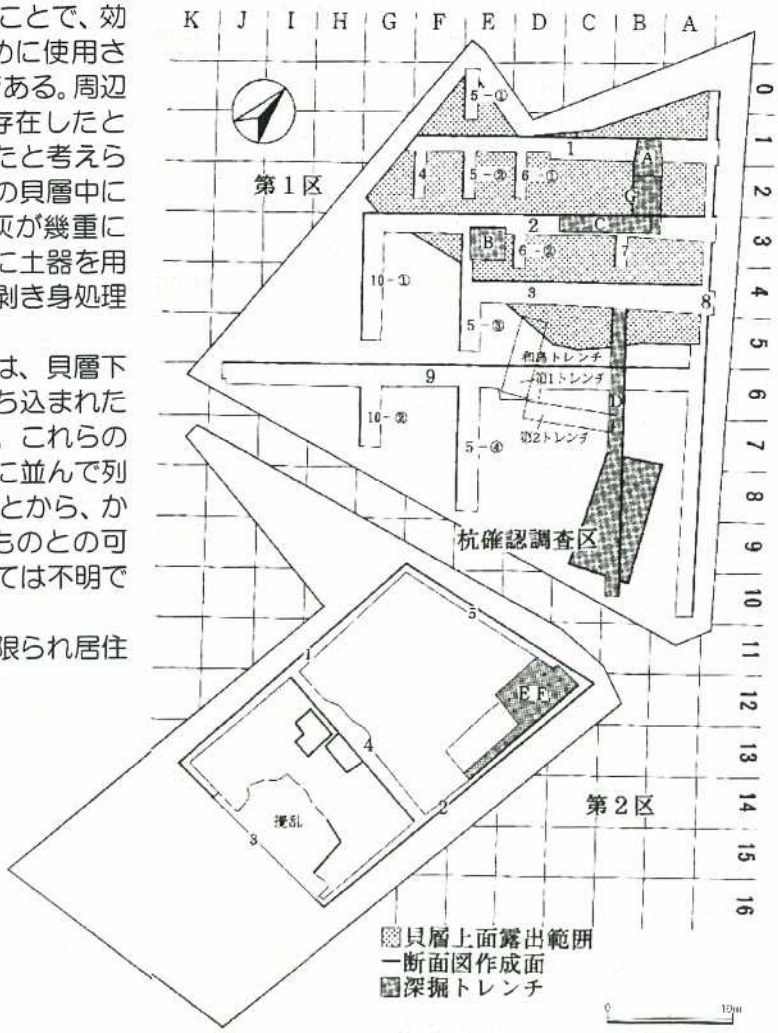

図32　Ａ地点の調査箇所（『史跡中里貝塚総括報告書』p36より引用）

写真 20　貝層および杭列

写真 21　木枠付土坑

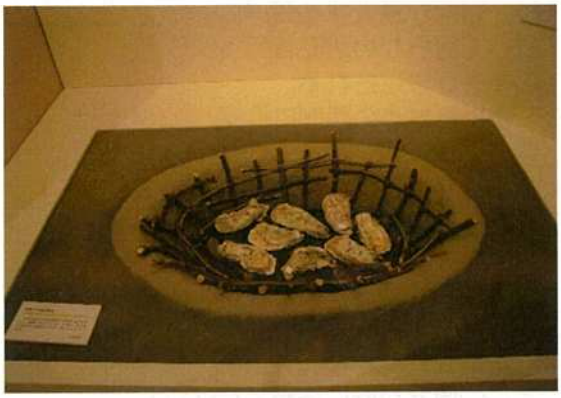

写真 22　貝処理施設模型

図 33　貝処理想定図（『奥東京湾の貝塚文化―中里貝塚とその時代―』p28 より引用）

② Ｂ地点（西側指定地）【中里貝塚史跡広場】

Ｂ地点は、平成１１年（1999）に調査が行われた地点で、平成２３年（2011）に調査が行われたＪ地点とともに中里貝塚史跡広場として暫定整備されている。

Ｂ地点では、マンション建設に伴う事前調査において、Ｌ字形の敷地南側 650 ㎡を調査区として、表土掘削を行ったところ、貝層が全面に現れた。貝層には６本のトレンチを入れて波食台まで深堀りした。敷地の北側には、範囲確認用の全長 58.0mの南北トレンチを設け、貝層検出後 5m間隔で 12 地点のボーリング調査を実施した。

検出された貝層はマガキを主体とするもので、層厚 2.0mに達する。貝層の堆積構造は北側に下がる斜交構造をしており、海側に貝殻を投棄している様子がうかがえる。Ａ地点同様に人工遺物は希薄で、貝層上部には焚き火跡などの薄層が無数に挟まる。

また調査区南東側、貝層直下の波食台上からは、木道とそれにつながる土坑が発見された。木道は１本の丸木を半截したもので、半截された面を上に向け、波食台に形成された窪みにすっぽりと収まるようにして出土した。樹種はコナラ亜属で樹皮も残っており、6.5mを測る材は、調査区外にも延びるとみられる。材上面の標高はほぼ一定で、一部に加工痕が確認された。

一方土坑は、木道の根に接し、波食台を楕円形に掘り込んで造られていた。規模は南北方向の長軸が 3.2m、短軸 1.7m、最深 0.5mを測る。木道と土坑からは、縄文土器 11 点、土器片錘２点、イタボガキ１点、加工材５点（木道含む）、石器２点の他、313 点の礫（うち 300 点は土坑に集中）が出土している。

木道には、土坑までの通路としての足場の確保や目印であった機能が想定されるが、土坑の用途は不明な点が多い。ただし土坑内部の貝類分析から、干潮時でも海水が残る潮だまりであったことが推定され、海水が浸入する海岸において何らかの活動を行った様子が想定される。

またＢ地点の西側に位置するＪ地点は、大正時代から操業する工場の解体工事ののちに範囲確認調査を行ったものである。クランク状の南北に細長い敷地 1,785 ㎡において貝層の堆積状況と範囲確認を目的とし、南北方向に任意で調査区南側に１本、北側に２本の計３箇所のトレンチ調査を実施した。

なお地表下 1.2m～1.5m付近の貝層中で湧水があるため、その対策としてトレンチ内にテストピットを兼ねた排水桝を設けた。水中ポンプで排水しながら調査は進められ、波食台の高度や貝層の層厚、焚き火跡の有無等が確認されている。

図 34　Ｂ地点・Ｊ地点の調査箇所
（『史跡中里貝塚総括報告書』p59 より引用）

写真 23　土坑とそれに続く木道

写真 24　木道断面

写真 25　土坑内礫出土状況

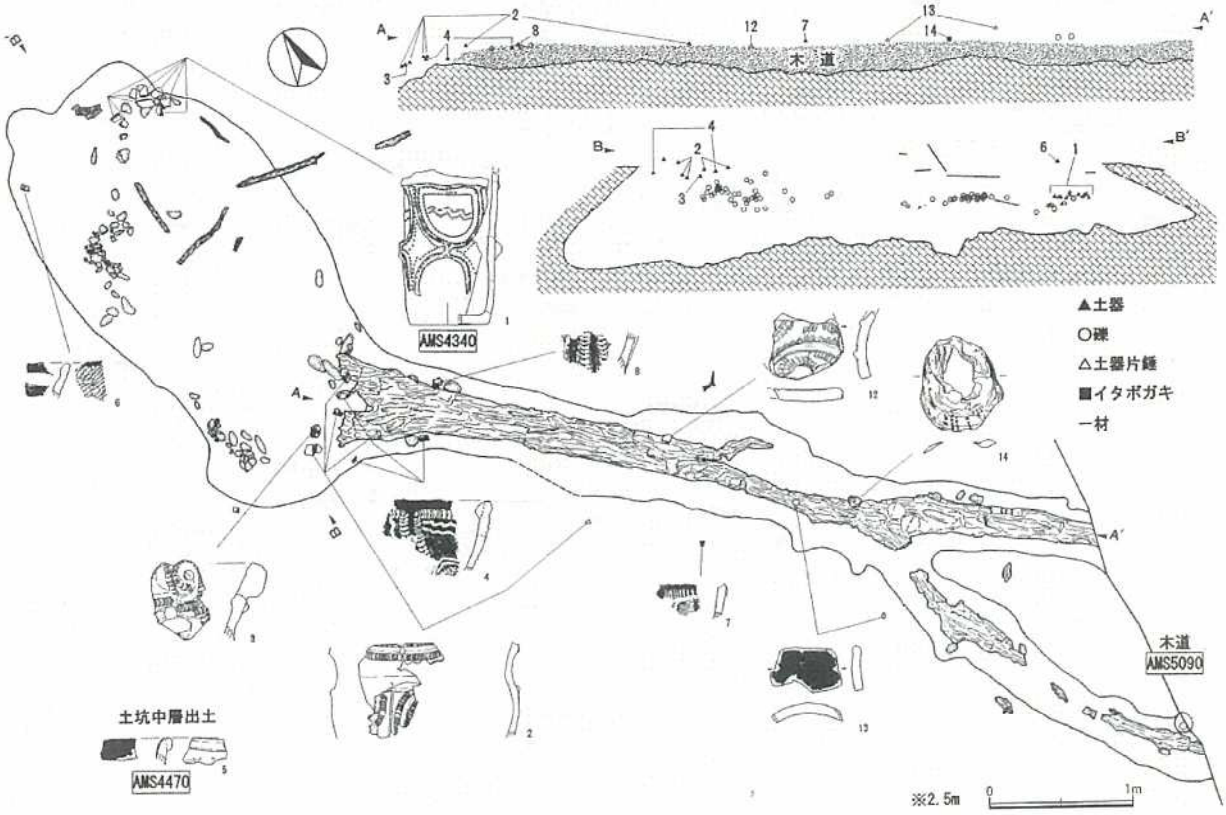

図 35　木道と木杭の出土状況
（『史跡中里貝塚総括報告書』p62 より引用）

3－2　史跡中里貝塚の本質的価値の把握

中里貝塚は、縄文時代中期から後期初頭の海浜部に形成された大型の貝塚である。採貝および剥き身処理、貝殻の投棄が近接した場所で、資源管理を行いながら、約800年にわたり繰り返された結果、形成されたものである。生活のにおいのしない分厚い貝層は、本貝塚が貝類加工に特化した場であることを如実に語る存在である。

しかし貝塚近隣に同時期の大規模集落はなく、膨大な貝類の消費に見合うほどの人口があったとは考え難い。だが視野を広げると、石神井川上流など武蔵野台地に刻まれる中小河川に沿うように、同時期の集落が密度濃く分布する。

武蔵野台地の北東側には荒川、南西側には多摩川が流れ、武蔵野台地を画するが、その荒川や多摩川あるいは東京湾へと注ぐ、いくつもの中小河川の流れが台地に谷を刻んでいる。それら河川の多くは、扇状地形を成す武蔵野台地の内陸部に水源をもち、長いものでは流路延長が25㎞を超える。これらをさかのぼることで、河口部から台地内陸部まで比較的容易にたどり着くことができる。殻から取り出し、干し貝とした貝類は保存にも運搬にも適している。本貝塚で加工された貝類は、内陸部集落まで持ち運ばれ、彼の地で消費されたと推察される。

貝塚は立地や出土遺物（食資源の残滓などを含む）の違い、居住地か否かなどによって「ムラ貝塚」と「ハマ貝塚」という類型に区分される。中里貝塚は「ハマ貝塚」を代表する貝塚であり、縄文時代の生産や流通、社会構造や地域的な分業体制などを考える上で不可欠の遺跡である。「史跡中里貝塚保存活用計画」では、中里貝塚が有する本質的な価値を、次の5点に整理している。

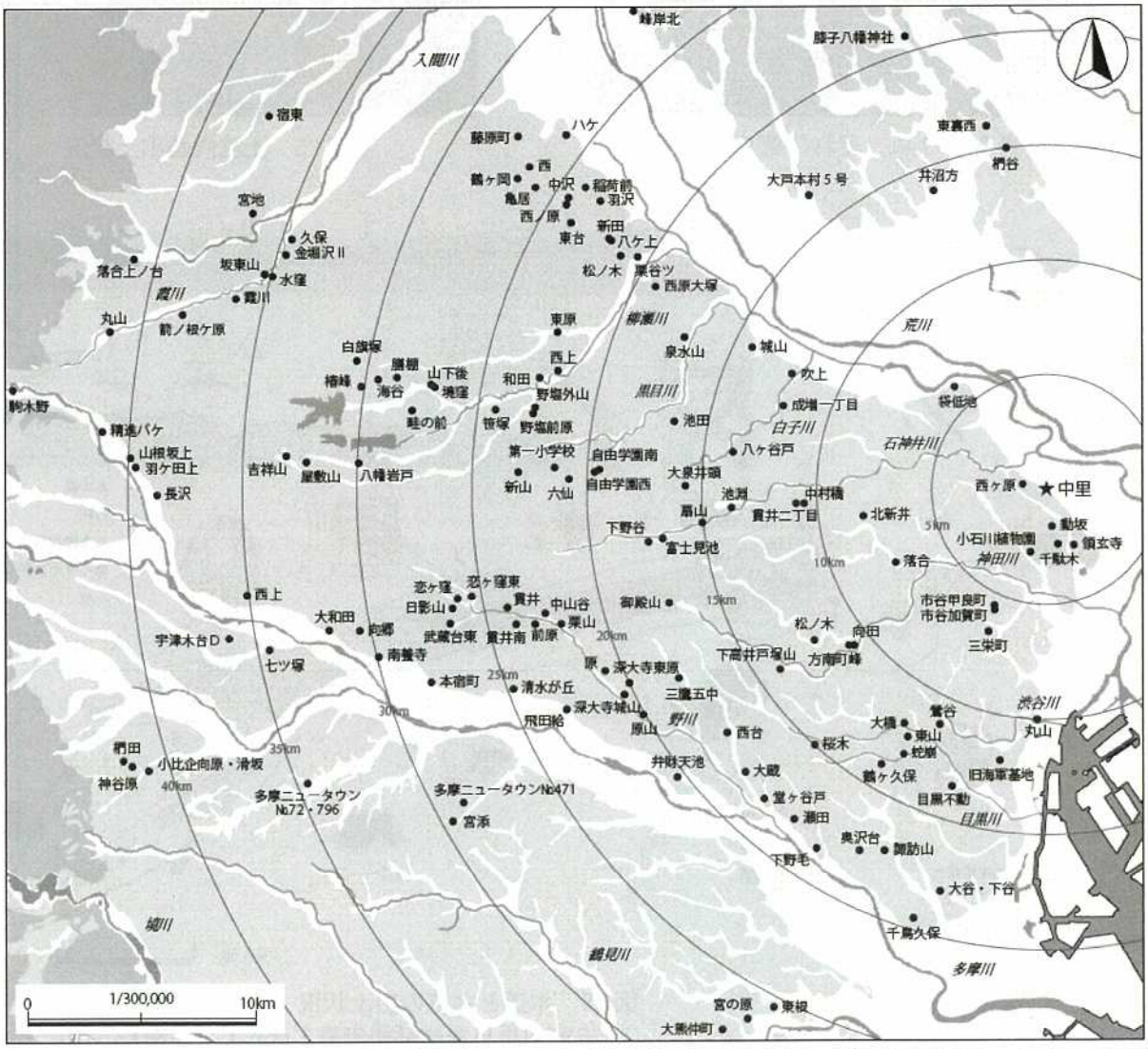

図36　武蔵野台地および周辺の縄文時代中期主要遺跡分布図（『史跡中里貝塚総括報告書』p14より引用）

（1）貝類利用に特化した場

中里貝塚で検出された遺構は、貝層の他には木枠付土坑や焚き火跡の貝類の剥き身処理に関わるものに限られ、居住施設はみられない。出土遺物は、土器や石器などの人工遺物が少なく、貝類以外の動物遺体は獣骨類がなく、魚骨もごく微量であった。中里貝塚では狩猟活動はみられず、漁労活動も採貝以外は極めて低調であった。

このことから、中里貝塚は貝類利用に特化した場であり、活動の限定性が顕著で、「ハマ貝塚」の典型的な特徴となっている。

（2）専業性の高さを物語る貝塚

貝種はマガキとハマグリの２種類に限定し、しかも大型個体が選択的に採貝されている。マガキとハマグリは採貝季節が異なり、食材の旬を意識した資源の利用形態が見て取れる。マガキとハマグリの貝肉は干貝に加工されたと推定され、貝殻などの残滓は海岸線に廃棄し、貝層が形成された。また、大型個体の均質的なサイズを維持するため、生産者集団の計画的な資源管理が予測できる。

中里貝塚で組織的に行われたマガキとハマグリの干貝加工は、このような専業性の高さを物語っている。

（3）国内最大規模を誇る貝層の分布範囲

中里貝塚の貝層は、東西方向に長さ 700m、幅 100m以上の広い範囲に分布し、貝層の中心部分の層厚は 2.0～4.5mと厚い。

帯状に連なる貝層の形状は、「ムラ貝塚」にみられる馬蹄形や環状とは大きく異なる。また、貝層の面積は約 61,800m^2、その総体積は約 92,700m^3 とみられており、関東地方の最大級とされる東京湾東岸の大型貝塚と比べ、隔絶した規模を有している。その要因は、縄文時代中期中頃から後期初頭にかけて約 800 年間に亘る、継続期間の長さと規模の大きさによるものである。

このように、中里貝塚の貝層規模は国内で最大規模であり、他に例をみない。

（4）海浜部の景観を復原できる縄文貝塚

中里貝塚は、縄文時代中期の海岸線に大量のマガキとハマグリの貝殻を廃棄し続けた結果、干潟を埋め立てて形成された貝塚である。

その立地は、海退が進んだ縄文時代中期に形成された田端微高地という砂洲の北西辺に面している。中里貝塚北側には内湾が広がり、マガキやハマグリが生息する泥質干潟や砂質干潟の水域環境になっていた。

中里貝塚は、各種分析を通じて当時の立地や環境を明らかにすることが可能な、多くの情報を包含する貝塚である。

図 37　中里貝塚想像図（さかいひろこ氏作画）

（５）内陸部集落へ供給する拠点となる貝塚

中里貝塚で生産された膨大な量の干貝は、石神井川など武蔵野台地を刻む河川流域の集落遺跡群に供給されたものと考えられる。これら内陸部集落の需要の高まりと軌を一にするように、干貝の生産加工が専業的に行われた中里貝塚は、生産と流通の拠点となる貝塚として位置づけられる。このことから、沿岸部の漁労集団と内陸部の狩猟・採集集団は地域的な分業体制を敷き、両者の間で食料物資などを交換することで、陸海の多様な資源環境を利用する広域的システムを構築していたと推定できる。

中里貝塚は、東日本に展開した縄文時代という定住化社会において、高度な水産資源の利用形態を象徴的に示す「ハマ貝塚」であり、自給自足を超えた集団間の互恵関係がもたらす縄文社会を考える上でも重要である。

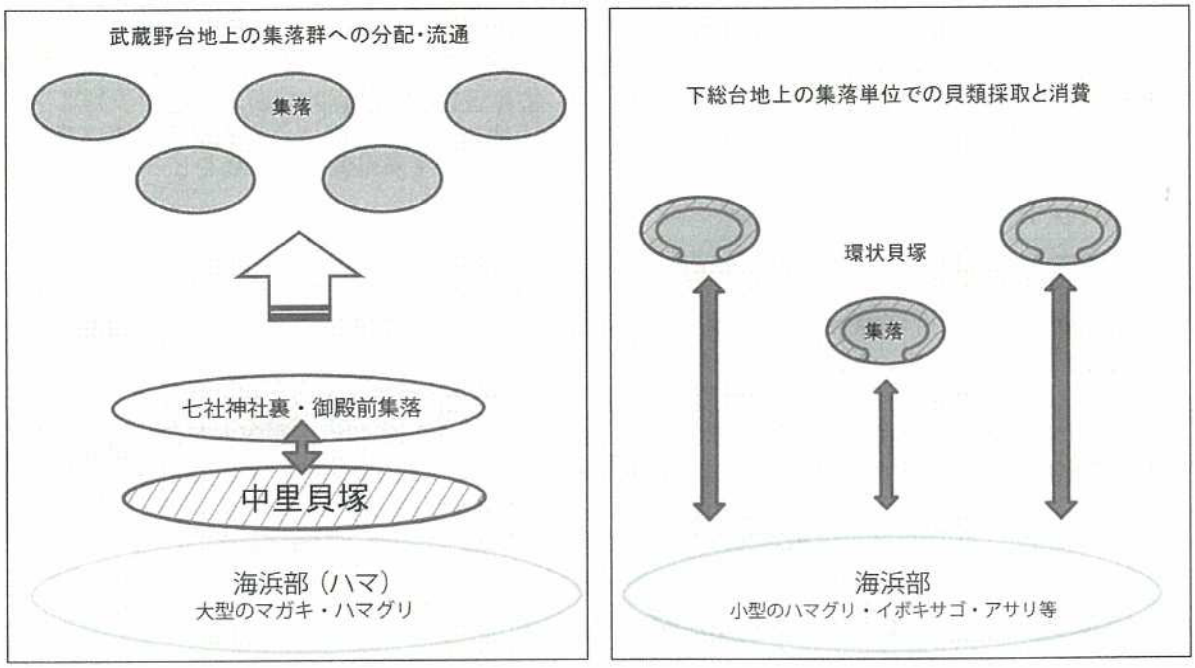

図 38　武蔵野台地と下総台地の貝類利用形態の地域性
（『史跡中里貝塚総括報告書』p179 より引用）

ムラ貝塚とハマ貝塚

ムラ貝塚

居住空間に付随して設けられた廃棄空間の一つであり、破損した土器や石器などの不要となった生活資材や食料残骸などの多様な廃棄物から構成されている。

（例）西ヶ原貝塚、加曽利貝塚（千葉県千葉市）

ハマ貝塚

海浜部生態系（ハマ）の管理を行い、その資源をムラとは異なる空間で加工した貝塚である。

（例）中里貝塚、大西貝塚（愛知県豊橋市）

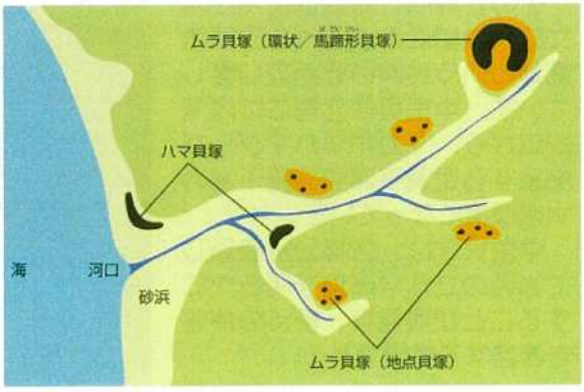

図 39　（『奥東京湾の貝塚文化－中里貝塚とその時代－』p19 より引用）

3-3　史跡を構成する要素

史跡の指定地およびその周辺に存在する要素は、「本質的価値を構成する要素」と「本質的価値に準ずる要素」、「その他の諸要素」に分類できる。

表７　史跡構成要素

史跡指定地内

本質的価値を構成する要素	最大厚4.5ｍの貝層、木道、土坑、焚き火跡、貝層に打ち込まれた杭、作業空間としての砂堆（木枠付土坑を含む）、波食台地形、地下に埋蔵されているその他の遺構や遺物、北区飛鳥山博物館に展示・収蔵されている貝層の剥ぎ取り標本や出土遺物	
その他の諸要素	本質的価値に密接に関わる要素	**史跡の保護に有効な要素** 史跡標柱、史跡の解説板、境界標
	それ以外の要素	**史跡の保存活用に有効な要素** 住宅密集地のオープンスペース、ベンチ、屋外卓、公園灯、金網柵、フェンス扉、分電盤、トイレ、水飲み台、植栽
		史跡保護のために調整が必要な要素 広場の看板、町会・自治会の掲示板、防球ネット、時計、防災倉庫、防火水槽、資機材庫、ゴミ箱、ブロック敷、集水枡、側溝、植栽（地下遺構に影響を及ぼすおそれのある高木など）

史跡指定地外

本質的価値を構成する要素	最大で長さ700ｍ、幅100ｍに広がる貝層、作業空間としての砂堆、地下に埋蔵されているその他の遺構や遺物	
本質的価値に準ずる要素	江戸前期～明治期の貝殻を材料とした産業（胡粉・焼石灰）、古代に遡るとみられる道路、中世板碑、古墳（人物埴輪・刀子・玉類）	
その他の諸要素	本質的価値に密接に関わる要素	**中里貝塚の当時の姿を理解する上で重要な要素** 中里遺跡（丸木舟、集石遺構など）、高台の集落（七社神社裏貝塚、御殿前遺跡、西ヶ原貝塚、東谷戸遺跡など）、当時の活動の場を想起させる地形（田端微高地、飛鳥山微高地）
	それ以外の要素	**史跡保護のために調整が必要な要素** 中里貝塚に広がる宅地、道路、鉄道敷地など

３－４　史跡指定地の現況

１．史跡の整備・活用のための諸条件の把握

（１）計画対象地の主な活用状況

①　史跡指定地

２箇所の指定地は、「中里貝塚史跡広場」「上中里２丁目広場」として一般開放されている（夜間は閉鎖）。線路群に挟まれる位置にあり、ＪＲ３駅（尾久駅・上中里駅・田端駅）から近いため、見学者の多くは徒歩で訪れている。史跡の見学を主目的で訪れる個人見学の他、北区観光ボランティアガイドなど街歩きの一環としての団体見学も散見される。ただし史跡の活用に特化したボランティア等の組織はない。なお発掘調査の際には、現地見学会や地元説明会を実施し、平成８年（1996）の調査時には、２日間で 3,000 人を超える見学者が現地を訪れている。

また住宅密集地に位置する数少ないオープンスペースであることから、ラジオ体操やもちつき大会、防災訓練などの地域交流の会場、また園児や高齢者の散歩、休日のピクニックなど、地域住民の憩いの場として利用されている。平成 23 年（2011）３月に発生した東日本大震災など、災害時の一時的な避難場所としても活用されている。

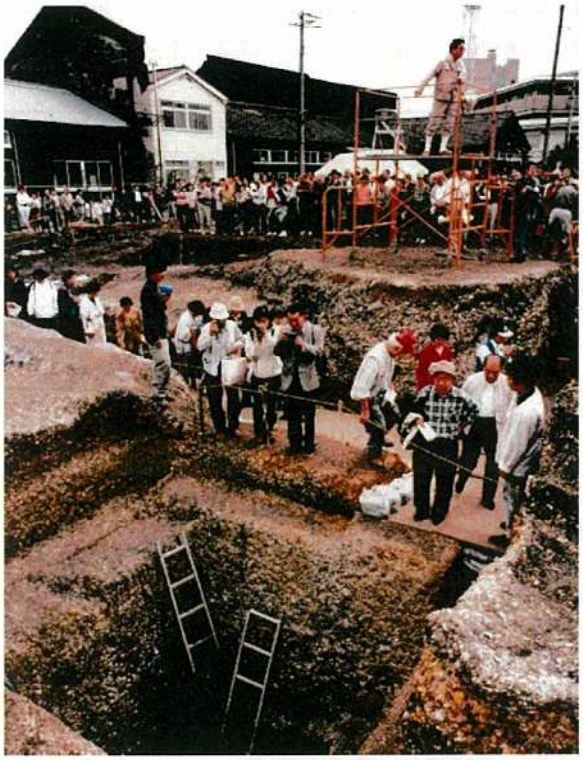

写真 26　現地見学の様子（平成８年（1996））

写真 27　地域イベントの様子

② 北区飛鳥山博物館

東京都北区王子一丁目の飛鳥山公園内に立地する区立博物館である。郷土風土博物館として、北区の歴史・文化・自然について総合展示を行っている。来館者数は年間 12 万人前後を数える。ＪＲや東京メトロ、都電、都バス等の公共交通機関、自家用車を利用しての個人見学のほか、学校や高齢者施設、街歩き等の団体見学にも多く活用されている。

中里貝塚に関しては、貝層剥ぎ取り標本の常設展示や出土資料の収蔵の他、企画展や講座・シンポジウム等の普及事業を展開している。

またパンフレットやリーフレット、史跡を巡るガイドマップ等を作成・頒布し、史跡の周知を図っている。なおこれらの普及事業は、学芸員をはじめとする博物館職員が中心となって行っている。現状として友の会やボランティア等の組織はない。

企画展示

団体見学

シンポジウム

野外講座

常設展示室活用講座

印刷物

写真 28　博物館事業の様子

また北区飛鳥山博物館では、開館翌年の平成 11 年（1999）に、学芸員と北区内の主に社会科から選出された教員とで構成する博学連携委員会小学校部会・中学校部会を設置し、小中学校における博物館利用の可能性について、さまざまな調査・検討を重ねてきた。そして現在までに、常設展示の団体見学の受け入れ体制の強化や出張授業、見学・体験プログラムの実施、「博物館利用ガイド」の作成、収蔵資料の貸出等を行っている。とりわけ小学校３年生対応事業「来て、見て、さわって！昔の道具」（令和２年度は「来て、見て、知って！昔のくらし」）は、実物資料を介した博物館と教育現場の協働事業として、注力している事業の１つである。

本事業は社会科単元に対応する事業として例年冬季に実施しているものである。この学校対応事業は、調べ学習（昔の道具を実際に見たり触ったりして、昔のくらしぶりを調べる）と体験学習（昔の道具を使って、当時の生活を体感する）の二部構成で展開しているものである。年度初めの６月頃に各学校に向けて事業の周知を行い、10 月に参加校の募集を行っている。調べ学習のみならず、昔のくらしを体験できるとのことから、平成 13 年（2001）の開始以降、申込校数は年々増加し、近年では北区内公私立小学校のほぼ全校が参加している状況である。

なお展示見学と体験学習とをセットにしたプログラムにおける学習効果は、歴史学習を行う小学６年生においても期待されているところである。すでに例年、数校に対しては、学校単位での常設展示見学（主に旧石器時代～古墳時代）と、体験学習「縄文土器づくり」「勾玉づくり」などを行い、学習効果への好感触を得ているところである。しかし小学校３年生対応事業のように、年度当初の事業周知や参加校の一斉募集は行っていないことから、当該事業ほどの広がりはない。全校参加に向けて、受け入れ態勢の強化と教育現場への働きかけを進めているところである。

写真 29　出張授業の様子

写真 30　調べ学習の様子

写真 31　体験学習の様子

（２）地域住民等の要望

これまでに地元説明会やワークショップ等で、史跡の整備活用に関しては、さまざまな要望や意見が寄せられている。主なものを以下に記す。

史跡指定地について

- 実際の貝層をみられるようにしてほしい。
- 貝層の剥ぎ取り標本を展示するなど、実物又は模型を作り、直接みたり、触れられたりできるようにしてほしい。
- 貝層の発掘体験をしてみたい。
- 干し貝作りや縄文フェスティバルなど、体験イベントを開催してほしい。
- 管理や解説をする指導員がいると良い。
- 憩いの場としてトイレやベンチ、日除けなどの便益施設を設置してほしい。
- 今後も地域のふれあいの場や防災拠点として、地域住民のための機能を維持してほしい。

動線計画について

- 最寄り駅からの案内やサインを、順路に設けてほしい。
- 住民生活に配慮した動線を案内してほしい。
- 見学地が離れているので、シャトルバスなどで移動できると良い。

その他

- 貝塚ツアーを行ってほしい。
- VR（仮想現実）やAR（拡張現実）等で、貝塚や海岸、縄文人のくらしの様子をみてみたい。
- 課外授業に組み込んでもらうなどして、小中学生が定期的に勉強できるカリキュラムづくりが必要。
- 史跡展示施設を設置し、見学や体験等ができるようにしてほしい。
- 史跡のPRにはキャラクターが必要。

曽谷縄文祭り（千葉県市川市）

軍神原遺跡発掘体験（宮崎県都城市）

加曽利貝塚断面観覧施設（千葉県千葉市）

パーゴラベンチイメージ

写真 32　各地での整備活用例

２．課題の整理

（１）計画対象範囲全体

現地性

・計画対象範囲は広大な範囲に及ぶが、その大部分は鉄道や道路等の公共交通施設や住宅、商業ビルなどに利用されている。史跡指定地は２箇所に分かれているものの、両所を合わせると貝層分布範囲の約 1/10 の広さとなる。しかしながら、ともに市街地に埋没した状況にあるため、史跡全体を具体的に理解することは困難である。

周辺環境

・中里貝塚史跡広場と上中里２丁目広場の位置、また２つの史跡指定地と北区飛鳥山博物館との位置関係や距離、最寄り駅等からの動線を示す案内施設がない。
・JR 線線路西側台地上に分布する七社神社裏貝塚、御殿前遺跡、西ヶ原貝塚といった中里貝塚の形成に深くかかわる遺跡の性格や位置関係を示す案内施設がない。
・計画対象範囲内の移動手段は、徒歩に頼る部分が大きく、ユニバーサルデザインとなっていない。

運営体制

・史跡の本質的価値の発信は、現在のところ、博物館活動に付帯するものが主であり、中里貝塚の整備活用に特化した活動組織がなく、また他のボランティア団体等との連携も不十分である。

（２）　史跡指定地

①　中里貝塚史跡広場

現地性

・現在は暫定整備ということもあり、遺構を表示する施設としては史跡標柱、文化財説明板のみで、広場内で史跡について学べる場、遺構や遺物を理解し体感できる場になっていない。
・現地で史跡の本質的価値を体感できることが望ましいが、周辺は地下水位が高いことから、遺構を再度露出させ展示する等の手法による実物資料の展示は現実性に乏しい。
・北区飛鳥山博物館から約 1.5 ㎞と移動距離があり、博物館に展示されている「中里貝塚」の歴史性、遺構や遺物について現地性を体感することが難しい。

活用環境

・広場内は、芝生広場となっているが、トイレやベンチ、日除けとなる施設など、便益施設が整備されていないことから、体験学習の場のみならず、“休憩”、“くつろぎ”といった滞留目的にも対応していない。

②　上中里２丁目広場

現地性

・現在は、広場を主とした地区の街区公園としての要素が強く、史跡を表す施設としては史跡標柱、文化財説明板のみで、広場内で史跡について学べる場、遺構や遺物を理解し体感できる場になっていない。
・現地で史跡の本質的価値を体感できることが望ましいが、周辺は地下水位が高いことから、遺構を再度露出させ展示する等の手法による実物資料の展示は現実性に乏しい。
・北区飛鳥山博物館から約 1.5 ㎞と移動距離があり、博物館に展示されている「中里貝塚」の歴史性、遺構や遺物について現地性を体感することが難しい。

整備環境

・名称が「上中里２丁目広場」となっており、史跡との関連がイメージしづらい。
・広場南側の既存樹木が成長しており、地下遺構への影響が懸念される。